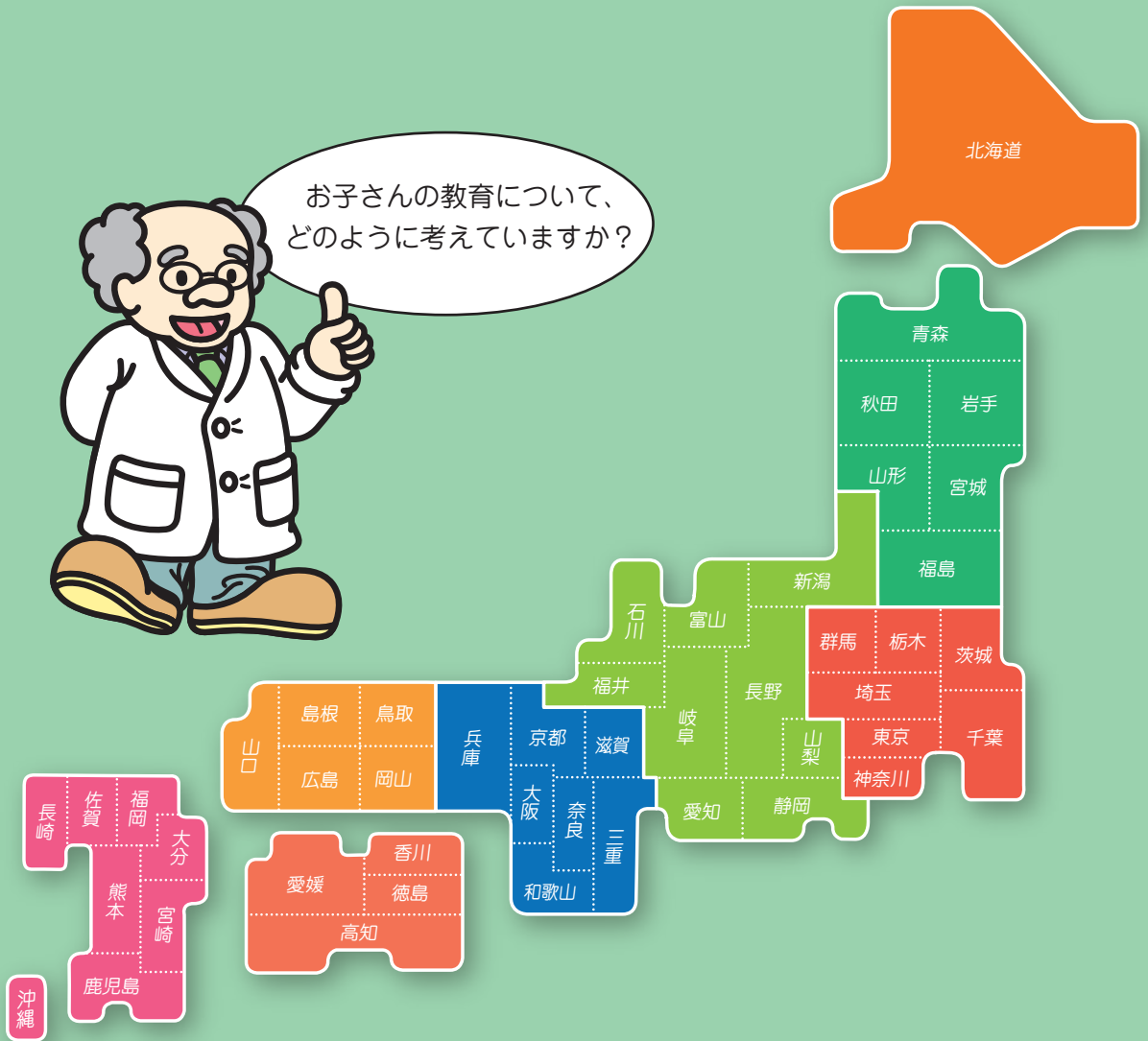


小・中学生のお子さんとともに帰国されるご家族へ

帰国に向けて



公益財団法人 海外子女教育振興財団

〈帰国に向けて〉 海外における家庭での教育方針について

いずれは日本に戻ることを考えると、帰国後の学習が気になりますが、現地校・インターナショナルスクール・日本人学校を問わず、どのような学校に通う場合でも、**現地の学校の勉強に集中し、学校生活を順調に送れるようにすることが第一です**。通学する学校の勉強に真剣に取り組み、友達との交わりを大切に、充実した学校生活を送ることが、お子さんの成長にプラスに働きます。

日本人学校で学ぶ場合は、学校と家庭との往復にとどまらず、現地の文化・自然に触れ、地域のスポーツ活動や習い事などを通して現地交流を行い、日本ではできない体験をお子さんができるだけ味わえるようにしてあげてください。

現地校・インターナショナルスクールで学ぶ場合は、外国語の習得に時間がかかることを理解し、お子さんが現地の学校に馴染んでいけるよう、ご家庭でサポートしながら見守ってあげてください。

海外では、学校の学習を中心に据えることが大切ですが、どうしても日本語に触れる機会が減ります。母語の形成時期（幼児期～低学年）を海外で過ごすお子さんの場合は特に、母語の保持伸長に関して家庭で十分に配慮しなければなりません。中学年以上のお子さんの場合も、日本語による読書の習慣をつけ日本語の読解力を育てていきたいものです。この他、補習授業校への通学や通信教育の受講を通して、わずかな時間でも日本語や日本の学習を継続することが、帰国後の適応につながります。

異なる国民性、異なる常識、異なる法律など、根本的に違いの多い海外での生活は、ご家族の皆さんにとって大きな苦勞を伴いますが、お子さんが、多文化を理解し、国際感覚を身に付けるよい機会です。吸収力がある子どものうちに経験できる海外生活を意義深いものとするために、目先のことだけにとらわれることなく幅広い視野を持って、教育方針を立てることをおすすめいたします。

Q1 帰国が決まりました。特に注意すべき点がありますか？

A1 帰国が決まると、海外で築き上げてきた生活から帰国に向けての準備を始めなければならず、親も含めて家族全員が複雑な心境になるでしょう。親が帰国に対して消極的な姿勢でいると、それはお子さんにも伝わります。**帰国先の地域の事情や生活情報を事前に収集してから、家族で話し合いの場を設け、帰国に向けて前向きに取り組んでいきましょう**。また、帰国後の学校生活・学校選択についても話し合い、お子さんたちが少しずつ日本の学校に編入学するイメージを持つようにしてあげましょう。

※財団では教育相談を実施しています。詳しくは裏表紙をご参照ください。

～ワンポイントアドバイス～



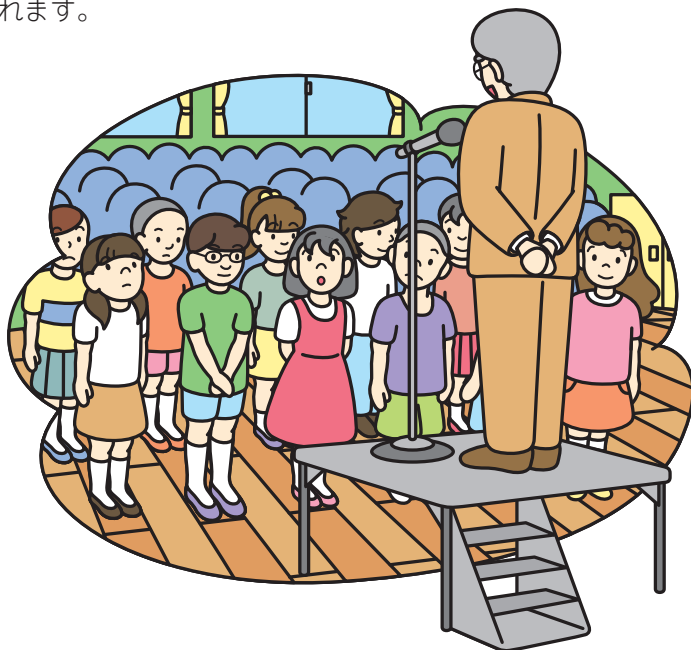
日本での義務教育期間中に帰国した場合、住居が定まると学区内の公立小・中学校の年齢相当学年に編入学することができます。

義務教育期間後に帰国する場合は現地で何年生を修了したかによって、編入学する学年が決まりますので、それぞれの学校に事前に問い合わせをしてください。

Q2 「帰国生受け入れ校」と呼ばれる学校は、一般の学校と何が違うのでしょうか？

A2 入学・編入学試験の方法や入学後の指導において、“帰国生に対して特別な配慮をする学校”のことを「帰国生受け入れ校」と呼んでいます。「帰国生受け入れ校」での指導の特徴には、大きく分けて次の二つがあげられます。

- ①【適応指導】日本語をはじめ、日本の勉強で遅れている部分を補う指導。具体的には、個別の補習、教科ごとの習熟度別指導を行う。
- ②【特性伸長指導】外国語力など、海外で身につけてきた特性を伸ばす指導。学校によっては英語力だけに着目している学校もあるが、レポートや個別研究などが多い海外での授業で培われた問題発見・解決能力、論理的思考力や自己表現力の伸長などに力点をおく。



「帰国生受け入れ校」にも、国立・公立・私立の学校があります。公立小・中学校の帰国生受け入れ体制は地域によってさまざまですが、帰国生が多い地域では、これまでの経験と実績から独自の施策を行っています。中には、専任の先生が取り出して個別指導を行ったり、英語力保持教室を開いたりしている学校もあります。公立高校では、特定の「帰国生徒受け入れ校」を指定している地域とそうでない地域がありますので、詳細は事前に各都道府県の教育委員会に問い合わせる必要があります。

また、一部の国立大学附属校では、教科の学習にかなりの遅れや未学習部分がある児童生徒を対象に、学力の回復と学校生活への適応を目的に普通学級とは異なる「帰国児童生徒教育学級」を設けていたり、一般の学級に「帰国生を混入させて個々の子どもの状況に応じた指導」を行ったりしている学校があります。

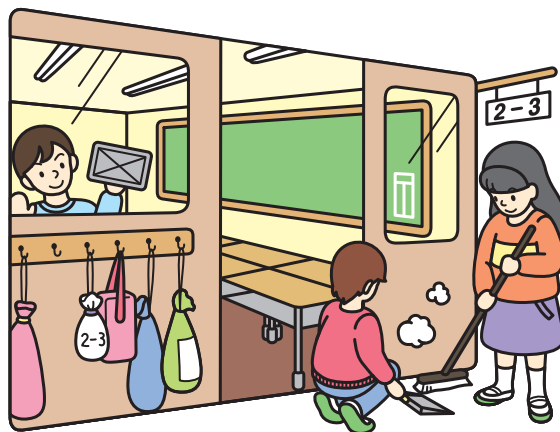
「帰国生受け入れ校」には私立校が多いのですが、それらの学校は首都圏・近畿圏など、帰国生が多い地域に集中しています。私立の「帰国生受け入れ校」での選抜方法、入学後の受け入れ体制は学校によって千差万別です。日本語のフォローをしたり、日本の教科学習での遅れや未学習部分を補ったり、外国語を保持伸長するシステムを整えたりしている学校もあれば、帰国生への配慮は入試の時点だけで、受け入れ後は特別な指導は行っていない学校もあります。「それぞれの学校がどのような意図で帰国生を受け入れているのか」「帰国生に何を期待しているのか」について、学校のホームページ、学校説明会、学校見学などさまざまな方法で、情報収集に努めることが大切です。

※財団では、帰国生受け入れ校の情報を掲載した「帰国子女のための学校便覧」を毎年発行しています。詳しくは裏表紙をご参照ください。また財団ホームページでも受け入れ校一覧を掲載し、各校のホームページにリンクしています。

Q3 帰国後の学校選びで迷っています。何にポイントをおいて学校を選択すればよいのでしょうか？

A3 学校選択の際、大切なことは、お子さんと学校の相性をしっかり見極めてミスマッチを避けることです。そのためにも、次の観点から学校の様子をできるだけ調べ、お子さんの学力、性格、ご家庭の教育観に合った学校を選びたいものです。

学校文化（校風）
教育方針
教育課程の特色
選考方法
帰国生の在籍者数
入学後の受け入れ体制
部活動や学校行事
卒業生の進路
施設設備
通学時間 など



お子さんと学校の相性をみるうえで、一番効果的なのは**実際にお子さんと一緒に学校を訪ねてみる**ことです。授業や部活動の様子を見学できる場合もありますし、校内で先生の話聞くことで帰国生に対する学校の姿勢をよみとることができます。また、登下校中の児童生徒の姿を眺めることで、「日常」をうかがい知ることもできます。

日本人学校に通っている場合や、補習授業校、通信教育等で学び、日本国内の子どもたちと同様に日本の学習内容を理解できる場合には、帰国生のための特別な入試だけでなく、一般入試という選択肢も考えられます。お子さんにとって帰国後、どのような教育環境がよいのかをよく考えて、学校選択することをお勧めします。

Q4 「帰国生入試」とは何ですか？

A4 「帰国生入試」とは、一般入試とは別に各学校や教育委員会が帰国生としての資格・条件を設定して行う入学試験のことです。試験の内容・方法は学校によってさまざまです。帰国生としての資格・条件は、保護者の海外勤務に伴って、海外に滞在した年数と帰国後の年数で出願資格を決めている場合が多いのですが、学校によってまちまちですので、募集要項での確認が必要です。また、現地校等と日本人学校で扱いを区別している学校もあります。

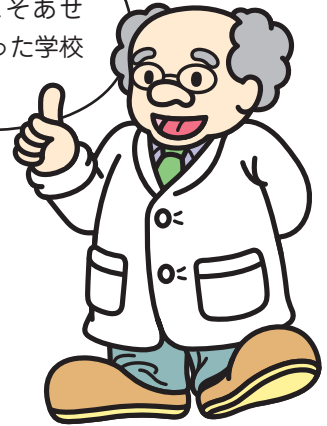
中学校の「帰国生入試」では、国語・算数を主とした筆記試験と面接（一般に保護者同伴）を行い、ほかにこれまで通学した学校からの成績報告書やその他の提出書類を検討して、総合的な判定で合否が決まります。学校によっては社会・理科を含めた4教科の筆記試験や作文などを加えている場合もあります。また、外国語を課している場合は英語が主となりますが、滞在地での使用言語の試験を加

えている学校もあります。

高校の「帰国生入試」では、学科試験で国語・数学・英語の3教科に絞っていることが多いのですが、社会や理科を加えた5教科を課す場合もあります。また採点や合否判定において「海外生活の事情を考慮する」などとしている学校もあります。なかには試験問題にふりがなをふったり、試験時間を延長したりするなど「弾力的な扱い」を行っている学校もあります。さらに、私立校では、英語1教科のみ、もしくは英語と国語または英語と数学の2教科の学科試験を行う学校もあります。また、学科試験ではなく書類や面接、作文で合否を判定する方法も広く行われています。

「帰国生入試」の時期は、一般入試の時期（1～2月頃が多い）よりも早く行われる場合が多く、私立校の中には、11～12月に海外で帰国生入試を実施する学校もあります。国内で行われる「帰国生入試」の時期にはかなりの開きがあり、前年の11月頃から始める学校もあります。したがって出願の時期や入試日について、早めに調べておく必要があります。

これから数年間、毎日通う学校だからこそあせらず、自分にあった学校を探そう！



～ワンポイントアドバイス～



帰国生入試では偏差値はあまり意味をもちません。理由として、

- ①特定の学校に大人数が受験することがほとんどなく、統計的に意味のある数がまとまらない
- ②ペーパー入試のほかに面接や作文、海外での学習歴などが加味されることが多く、数値化ができないことが挙げられます。

Q5

帰国後は帰国生入試の受験を考えていますが、準備すること、特に気をつけることはありますか？

A5

帰国が決まっても、最後まで現地での学校の勉強の手を抜かないことが必要です。日本人学校でも現地校等でも同じですが、受験勉強だけにかたよって、現地の学校の成績が下がると、帰国生入試の場合は不利になります。

受験の際、必要になる書類は学校によって異なるので、入学を希望している学校の募集要項を見て早めに準備しましょう。日本人学校の場合は調査書、現地校等の場合は在学・成績証明書が必須ですが、推薦入試などを受験する際には推薦書も必要になることもあります。出願期間に備えて、余裕をもって在籍校側に必要部数をお願いしましょう。その他、通知表、各種賞状や保護者勤務先からの海外在勤証明書が提出書類に含まれることもあります。

海外在留中に思い出に残ったことなどのメモを作っておくと、自己紹介、作文、面接試験などに活用ができ、役に立ちます。日頃から書類やメモ等の整理・保存をするよう心がけましょう。

Q6 中学・高校受験をする場合、帰国の時期について何か注意する点があれば教えてください。

A6 中学受験では義務教育期間中の帰国になりますので、志望する学校の試験日程に合わせて帰国すればよいのですが、**高校受験では、海外の学校教育における9年の課程を修了したか、その年の3月までに学校教育における9年の課程を修了する見込みでなければ、出願資格が与えられないので注意が必要です。**

海外の現地校等では、日本の学校とは入学年齢基準日や学校年度の開始月と修了月が異なるうえ、現地校等に編入学する際、言語力の面から学年を下げる場合もあります。出願の時点で9年生を修了していれば、受験の日程に合わせて帰国することができますが、9年生を修了していない場合は、事前に帰国し、日本の中学に在学して、その中学を「卒業見込み」とする形で受験することになります。この場合は受験に必要な調査書の作成を考慮すると、遅くとも12月初旬までに編入学するのが望ましいとされています。なお、一部の帰国生受け入れ校には、9年生を未修了のままでも出願できる高校がありますので、各学校の出願資格・条件を募集要項で確認してください。

日本人学校は国内の中学校に準じた教育課程で学習するので、中学部を卒業すれば、国内の中学校を卒業した場合と同様に高校の入学資格等が与えられます。したがって、日本人学校中学部を3月に卒業見込みの者は、日本人学校から直接国内の高校を受験することが可能です。ただし、公立の全日制高校では、入学日までに都道府県内への転居が確実であることが応募資格となっている場合があります。応募資格の審査を出願書類の提出前に実施するところもありますから、帰国予定先の都道府県の教育委員会に早めに問い合わせましょう。

現地校等で6月に9年生を修了してから帰国する場合は、6月下旬以降に帰国して編入学試験を受けることになります。編入学を実施している帰国生受け入れ校では、7月上旬から中旬にかけて編入学試験を行い、合格者は9月から編入学するというケースが多いようですが、随時受け入れている学校もあります。

義務教育期間を過ぎてからの帰国は気をつけなければいけないね。



Q7 帰国しました。学校に通うにはどのような手続きをすればよいでしょうか？

A7 原則として、帰国してから2週間以内に、お住まいの市区町村の役所で住民登録を行うことになっています。公立の小・中学校に入学・編入学を希望している場合、市区町村のルールに従って学校が決まり、就学手続きを行います。編入学する場合は1、2日後には学校に行つて校長先生に会い、クラスなども決められて手続きが完了します。義務教育ではない高校の場合や私立・国立の学校を希望している場合は試験に合格しなければ、編入学が許可されません。いずれにせよ、帰国後、あまり時間をあけることなく、日本の学校に通うように心がけましょう。

Q8 日本の学校に入るにあたって、子どもにあらかじめアドバイスをしていただいた方がいい点などありますか？

A8 海外の学校から日本の学校に入る場合、親が思っている以上にお子さんは学習内容や学校生活にギャップや戸惑いを感じることがあります。海外の学校で身につけた良い点を自覚し、経験してきた異文化体験を、帰国後の学校生活でも生かしていけるよう、お子さんをサポートしてあげてください。



日本人学校で学んできた場合、日本国内の学校と比べて一見、学習内容や学校生活に大きな差はないように思えますが、学校全体の規模（児童生徒数が多い、少ない）、随時クラスメートが転校し編入してくる環境、スクールバスでの通学、現地語学習や現地交流を行うなど、海外特有の学習環境で学んできています。そういった、日本人学校と日本の学校の環境の違いについて、帰国する前にお子さんと話しておく、よりスムーズに日本の学校文化に入っていくことができるでしょう。

現地校等で学んできた場合、言語も学校生活も全く異なる環境で過ごしてきたわけですから、戸惑いが大きいことは当然のことです。日本の学校では、授業の進め方、成績のつけ方が現地校等とは違ったり、学校生活でも掃除当番や給食などがあったりします。また、日本語力の不足をどのように補い、習得した外国語をさらにどう伸ばすかという問題も生じてきます。これらの問題には「**長所を伸ばすことで自信を持たせる**」方法が有効です。外国語と異文化体験は長所です。外国語のレベルをさらに上げて自信を持たせれば、各教科で補わなければならない学習があったとしても、明るい気持ちで取り組んでいけるでしょう。また、身につけた外国語力を発揮する場を与えてあげると、慣れない日本の学校環境の中での息抜きの場となるでしょう。

クラスメートが当たり前のようにできることで、お子さんだけができないことがあっても悲観する必要はありません。ありのままの現状を受け入れ、謙虚に、そして自信を持って取り組んでいけば良い結果が出ます。海外で先生や友達との関係を築き上げていった時のことを思い出し、自分を理解してもらおうと同時に、相手を理解する努力が必要です。

※財団では「帰国子女のための外国語保持教室」を開催しています。詳しくは裏表紙をご参照ください。

帰国生であることに誇りを持ち、海外で経験してきたことを活かしていこう！



財団事業と出版等のご案内

教育相談（東京・名古屋・大阪）

現地での学校選択、手続きや教育制度、高学年のお子さんの帯同、帰国後の受入れなど、専門の教育相談員と相談ができる。面談・電話相談は要予約。ホームページからの相談は随時受付。

海外子女のための通信教育

海外子女専用の通信教育。現地校等で学んでいる小・中学生の学習状況を十分に配慮して作られた教材で、帰国後、日本の学校にスムーズに適応することを目的とした「小・中コース」のほか、幼児対象の「幼児コース」、小論文を書くための基礎的な力をつける高校生対象の「小論文コース」を実施。

帰国子女のための外国語保持教室（英語・フランス語）

（首都圏・中部・関西・Web）※フランス語は首都圏のみ

海外で身につけた語学力を保持していくことを目的に小学2年生から高校3年生までを対象に開設。年齢相当の総合的語学力維持を目標とし、読み・書き力の強化、および会話を通してのコミュニケーション力の強化を目的に構成。

帰国子女のための学校便覧（毎年11月発行）

全国の小学校から大学までの帰国生受入校と教育委員会の情報を掲載した入学・編入学ガイドブック。各学校の入学・編入学資格、条件や入試日程、選考方法、受け入れ後の指導内容の概要を紹介。（本体価格：3,333円＋税 会員割引価格：本体価格2,870円＋税）

新・海外子女教育マニュアル

財団教育相談室によって、出国の準備から帰国後の受け入れについてお子さんの教育に関するアドバイスを総合的にまとめた書。（本体価格：2,667円＋税 会員割引価格：本体価格2,286円＋税）。

公益財団法人 海外子女教育振興財団

2015年2月発行

東京本部

〒105-0002
東京都港区愛宕1-3-4
愛宕東洋ビル6階
TEL 03-4330-1349
FAX 03-4330-1355
E-mail service@joes.or.jp

関西分室

〒530-0001
大阪府大阪市北区梅田3-4-5
毎日新聞ビル3階
TEL 06-6344-4318
FAX 06-6344-4328
E-mail kansai@joes.or.jp

ホームページ <http://www.joes.or.jp>